**５月号**

**『啐啄』**

 　　　　　　　　　　　　　　　瀬田中学校　校長　今井　弘樹

☆彡　　 平成30年度の瀬田中学校は、4月9日に新1年生255名の生徒の皆さんが入学し、新2年生256名、新3年生279名、全生徒790名、28学級でスタートを切らせていただきました。校舎の大規模改修も地域の皆様の応援もいただき、おかげ様で中庭を残し完了し新しく美しくなった校舎で生徒たちは学んでいます。

☆彡　　　今年度は、平成32年の3学期から始まる給食実施に向けて各階に配膳室を設置するための工事が1学期後半から始まります。中庭は卒業生の方が「中庭の芝生は実に素晴らしく、放課後、友だちとの憩いの場所として心なごむ思いで、私たちも大切に使いました。」と言っておられたような心なごむ芝生の中庭の復元に向けて、取組みたいと思っております。何卒ご支援ご協力の程、よろしくお願いいたします。**(次頁に、三大寺遺跡跡から現在の大江の新校舎に移転した当時の卒業生の言葉を紹介しています。)**

☆彡　　　さて、今は亡き臨床心理学者であり文化庁長官の河合隼雄氏は、子供時代を **「鋭い目で人生の真実を見抜くのびやかな子ども時代」、**中学生の時期を **「心の奥深く得体のしれぬものを抱ええて苦しむ青年期」** 、内面で物凄く大きな変化が起こっている **「さなぎの時代」** とも述べておられます。子どもにとって自分で自分がコントロールしていくのが難しくバランスがとりづらい時期になります。

☆彡　　　また、別の言い方をしますと、中学生時代は精神的自立に向けた大切な時期と言います。第２次性徴で性に目覚め、男女それぞれの身体に変化していきます。また、身体の変化が激しいため、それにつれて心の変化も激しく非常に不安定になっていきます。特に、身体の大きな変化を受け入れることができないと、心の不安定さもとても大きくなります。さらには、自我が発達し、物事に対して、否定的になってきます。自分がなぜ生きているのか、なぜ生まれてきたのかといった、哲学的な思索も始めるようになります。親に反抗的な態度を取ったり、独りで葛藤したり悩んだりするのも中学生の時期からです。

☆彡　　　中学生、高校生の時期は、大人になってきている自覚はあるのですが、まだまだ大人と同じようにはできませんから、潜在的に劣等感を持っています。また、学校で他の子供たちと比較されますから、やはり、多くの劣等感を抱えるようになります。心が不安定になり、反抗的になり否定的になるのも、自然な成長の流れと言えます。ですから、保護者の皆様には、中学生の我が子の成長と言えるこの反抗期を、子どもにとって成長する良い時期として過ごせるよう、心づもりをしておいていただくことが必要と考えます。

☆彡　　こうした保護者や生徒の皆さんの多様な心の悩みに応えてくれるのが心の専門家であるスクールカウンセラー(ＳＣ)であり、瀬田中の教員です。瀬田中学校はＨ３０年度もスクールカウンセラーの常駐校として3人のＳＣが様々な相談を受けています。1回だけでなく継続的にカウンセリングを受けることもできます。この時期の親御さんはいろいろと悩みが深いと思います。スクールカウンセラーへの相談は担任または学年の教育相談担当にお声がけください。もちろん学校の教員も相談をお受けし同じ歩調で歩んでいきたいと思います。　どうかよろしくお願いします。

☆彡　　最後に学校通信の『啐琢』の意味について説明させていただきます。『啐琢』は禅語「啐啄同時」からを元にした言葉です。「啐啄同時」とは、鶏の雛が卵から産まれ出ようとするとき、殻の中から卵の殻をつついて音をたてます。これを「啐」と言います。そのとき、すかさず親鳥が外から殻をついばんで破る、これを「啄」と言います。そしてこの「啐」と「啄」が同時であってはじめて、殻が破れて雛が産まれるわけです。これを「啐啄同時」と言います。これは鶏に限らず、師匠と弟子。親と子の関係にも学ぶべき大切な言葉です。つまり、**「人を育てる際には、機（タイミング）が大事」**ということを意味しています。

**☆彡　今回は約40年前に現在の大江の瀬田中学校が新築され、地域の皆様の協力を得て移転し、当時の価格で「三十億円」かかったといわれる美しい新校舎で学ばれた3人の卒業生が残されている ”感動の言葉” を紹介させていただきます。**

　　　☆彡　昭和51年1月13日に現在の大江にある「瀬田中学校大移転記念式典」が催されました。将来を展望して移転新築した素晴らしい環境で、ゆとりのあった学校。移転して５年で満杯となり、７年で分離校(瀬田北中学校)を開くことになりました。その７年間の歩みを記した『びわこ湖畔からの教育』 (昭和58年2月25日発刊) 書物には、「瀬田中学校はあくまで瀬田地区の唯一の中学校である」という認識と、「３０年近い歴史のある校舎(三大寺遺跡後)を第二小学校(瀬田南小)に譲って新しい天地を求め移転する」と書かれています。

☆彡　移転時の生徒会長は、「・・・・・。私たちの中学校が３０周年を迎えるこのとき、学校に大きな変動が起こりました。学校移転の大事業です。私たち生徒も必死に手伝いました。瀬田中を支え、育てていこうとするみんなの力があってこそ、移転ができたのだと思います。ほんとうにありがとうございました。心からお礼申し上げます。輝く琵琶湖の水面を見下ろし、遠く比良比叡の山なみを望む、こんなすばらしい自然の中の、堂々とした校舎で、いよいよ学習を始めます。よろこび一杯です。新しい校舎とともに、私たちも心を新らたにして私たちに課せられた課題に向かって努力します。新しい歴史のページを一人ひとりがつづっていくことを約束します。」 (生徒会長)　と宣言しておられます。

☆彡　「・・・・・。わたしたちが小学生のとき学校移転が行われました。小学校の帰り道、前から大きなトラックが来て、わたしたちの前を通り過ぎました。ふりかえってトラックの後ろを見ました。「わあっ !!」 思わずとびだした声。トラックは、今もくずれそうなほどに積み上げられた机や椅子を積んで、何台も何台も通り過ぎました。中学生のお兄さんやお姉さんが、大人の人達にまじって、汗みどろになって重い荷物を運んでおられたのを思い出します。わたしたちの瀬田中は、多くの先輩達の苦労の積み上げがあってこそ出来上がったものだと思います。この校舎の床にも壁にも、そんな苦労がしみこんで光っているように思うのです。」　(昭和53年卒業生)　と感慨を述べておられます。☆彡　「瀬田中学校に入学した時のことを今でも思い出します。『あれが瀬田中？』　わたしたち新入生を待っていてくれた瀬田中はあまりにも立派で、学校というより「研究所」という感じがしました。校門を入ると四階建ての校舎に圧倒されます。廊下は広く、グリーンの床は、見事に磨き上げられて、私たちの顔がうつるようです。壁には傷ひとつありませんでした。何よりも驚いたのは、冬の暖房です。寒い朝、どんなに早くに学校へ来ても、もうポカポカと暖かく私たちを迎えてくれました。大会議室からの展望のすばらしさは、言葉でいいあらわせないほどきれいでした。特別教室も設備が整っていたし、学校給食もエレベーターで運搬されました。中庭の芝生は実に素晴らしく、放課後、友だちとの憩いの場所として心なごむ思いで、私たちも大切に使いました。入学してからも「三十億円」という言葉を何回も耳にしました。そんなに大きなお金が費やされてできた学校の立派さは言うまでもありませんが、1,000人を越える生徒の一人ひとりが「三十億円」を合言葉に、この校舎を、この体育館を、この中庭を、このグランドを、校舎の隅々にいたるまで、ほんとうに大切にしようという気持ちに満ち満ちていたように思います。進路にも、部活動にも、今の瀬田中は最高の成績を上げています。これは、やっぱり、この新しい学校をみんなで大切にしてきたその結果だといえるとわたしは信じています。先輩のみなさん、本当にありがとう。この学校で学べる幸せを、ずっと後輩たちに伝えていくよう努力します。」　(昭和57年卒業生)　と決意を述べておられます。